

村野藤吾記念会

Togo Murano Committee

第24回村野藤吾賞

設計者 仙田 満

作品 国際教養大学図書館棟

選考理由

秋田市南部の閑静な杉林に囲まれて立つ国際教養大学図書館棟は、キャンパスの学習拠点を目指して計画された図書館である。グレートホールと名付けられ、木を主体とした構造の空間には、中心部に直径30cmの秋田杉丸太の柱6本が上部に開いて立ちあがり、そこから放射状に梁が11mのスパンで半円形傘状に伸びている。さらに8.5mの半円形平面が奥まで続き、壁面は開口部以外すべて書架で構成されている。4段ある書架の列は、奥に行くに従ってしだいに高くなり、上部は閲覧機として利用されている。閲覧席は、書架と組み合わせられ、半円形の段状空間にすることによって求心性が演出されると同時に、多様性と選択性のある空間を閲覧者に提供している。本を探して館内を巡りながら、それぞれが好む場所で閲覧できる、書斎の集合体のような理想的な読書空間である。

構造は、接合部分には「傾ぎ大入れ」など伝統的な工法を採用することによって、木材による架構を際立たせつつ、必要な部分には鉄材を用い、また下部にはコンクリートを採用している。このハイブリットによる合理的な構造と、緻密な収まりによるディテールが、建築空間としての質と密度を一層高めている。

建築設計がめざす理想の一つは、発注者の期待に対する完璧な応答である。それは、単に求められた必要への応答ではなく、その遠い先にある「願い」や「思い」までも読み取り、空間として実現する創造性による応答である。秋田杉の梁間から差し込む柔らかい光の下、いつでも自由に本と出会い、共に学ぶ楽しみが享受できるこの空間が、計画に際しての「願い」であり、「思い」であったことは、利用者によって建築が圧倒的に支持され、愛されていることから間違いない。

仙田 満氏は、子どもたちのための施設設計をライフワークの一つとして、遊びと学びの空間に優れた作品をつくり続けてきた。

今回の国際教養大学図書館棟は、これまでの成果を原型としつつ、図書館という新しいビルディングタイプによって昇華させた秀逸な建築であり、大きな感銘を世に与えた建築家に贈られる、村野藤吾賞にふさわしい作品として選出された。

村野藤吾記念会 代表 谷口吉生